

11 考察と今後の問題

大 森 正 樹 (南山短期大学教授)

以上の授業記録からどんなことが考えられるか、以下考察したい。

原論を担当する教員としては、様々なテーマを学生に示し、それを学生がこなし、人生の糧にしてほしいという願望がある。つまり、人間関係とは何か、生きるとは、自分は何者なのか、学生になる(である)というのはどういうことか、学ぶとは、学ぶことと学び方の関係、体験学習とは、そもそも体験とか経験とは何か、変化とは、人から影響を受けることと人に影響を与えていること、問題意識をもつこと、人の前で自分の考えを言えるようになること、討論の仕方を学ぶこと、読書、等々である。

それらは人間として基本的な問題(自己、人間関係〔相互に影響を及ぼすこと〕、価値観、体験、経験、変化、生きることといったやや哲学的、内省的なもの)や学習(学ぶことと学び方、体験学習、読書)の問題、そして自己の意見を他者の前で公表する能力の開発、といったものに分類される。そこから分かるように、原論とはずいぶんと欲張ったねらいをもった授業なのである。そしてこのような問題にあたっていくために、通常の講義形式を主体とする授業とは異なる体験学習方式をとり、進めていくのである。

その際、例えば、かなり哲学的な問題であっても、すぐに講義とか、読書にたよるのではなく、まず自分たちの生活の中からそうした問題が浮かび上がってくるよう、授業が組み立てられることになる。多くの場合、実習といった方法がとられる。このやり方は、非常に具体的な日常生活の中にほんのわずかではあるが、人生の問題性を気づかせるという利点がある。書物や他人の話の中だけに人生の諸問題はあるのではなく、現に生き、感じている日常生活の中にこそ、自分にとっての真の問題があるのだということに学生は気づくのである。と同時に、しかし、提供されたプログラムから、スタッフの狙ったポイントを必ずしも学生はつかまないという欠点もある。それは講義とか講話とい

う形でスタッフの狙っていることを学生の前に提示することが少ないからである。押しつけを避けようとするからである。そうではなく、学生自身が身をもって、味わったことの中から、自分の問題を見出してほしいとスタッフは願っているのである。それ故、当然のことにと言うか、このような材料から、直ちに思索へと移ることはむづかしいと言わねばならない。生活の範囲から抜け出すことが容易ではないし、18-19歳の経験はまだ自己の領域を超えていくほど豊かではないからである。

このような問題をかかえてはいるが、しかし、その他の点では、これまで受けてきた学校教育の枠をはずしていくというもくろみはある程度成功しているのではないであろうか。学生はスタッフの提供する様々な授業のやり方や中身から、これまで常識とされてきた授業の他に色々なことのできる可能性（たとえば授業という枠組みがあったとしても）があることを身をもって知るのである（また様々な仕方でも試みてよいこと）。そして自らが授業にかかわっていかねば授業というものは進みもしないし、得るところもないことを知るのである。

どんな授業をしていくかは、その都度話し合われて決められていくのだが、その時に用いられる実習は、既製のものであったり、新たに考え出されたものであったりする。新しいものは問題がないが、既にある実習を使う場合にはよく注意しておかないと、他の授業で実施したことのあるものも出てくる。授業場面が異なれば、同じ実習であっても、そのいわんとするところは違ってくると言えないことはないが、やはり実習は新鮮なものほどよいのであるから、重なりは避けるべきであろう。人関の授業はややもすれば似たような傾向のものが提供されるくらいがあるからである（このことは人関がそもそもラボラトリー方式による学習から発展して、学校教育の中に食い込んでいったことと無関係ではないであろう。この点は今後人間関係科が学校組織の中で発展していくときに、是非考えておかなければならない問題であると思う）。

ところで原論の授業では、あらゆるものが利用された。実習、小講義、学生によるリサーチ活動、ビデオ（映画）、KJラベル、創作活動（特に南短25周年に向けての歌作り。これはこの年度に限りのものであるので普遍性をもたない点が問題である）、戯曲、詩、音楽、新聞、ディベート、パネルディスカッション、クリスマス・カード作り、ジャーナル、等々である。学生の注意を喚起し、深く心に食い込んでいくようなものであれば、出来る限り利用しようというスタッフの願いがある。ただしそれらが常にその授業に、そして学生の状況に相応しいものであるかどうかは、検討の余地がある。スタッフとしては授業そのもののねらいと、学生のもつニーズに合わせて授業を組み立てたつもりではあっても、どこか学生には理解されていないところがある。つまり、学生が受け入れてくれたと思われる授業についての学生の評価は、楽しい授業で一生懸命やれたということが多いのだが、かえってその楽しさ(?)の影に本当は見たい問題が隠されてしまい、学生の視野を眩ませているのではない

だろうかと一種危惧の念を抱くことも事実なのである。それは、一つは学生への伝え方（プレゼンテーション）の問題かもしれない。そのように考えると、スタッフとしてもうひとつ行き届いていなかったと思わせられることもあるのである。

そういう問題も多々含んでいるのではあるが、願うところは、最初にも書いたように、この原論が人間関係科の目指すものを学生に伝達し、理解してもらうこと、そして、根源的な人間理解への道が学生の中に築かれること、である。学生は高校までの教育とは違った自由な雰囲気の中で、多くの学生と共に学ぶことによって、人と人とのかかわりの大切さを実感している。それはまず何よりも既成のレッテルにあてはめられることなく、自分がそのまま人に受け入れられたという実感なのである。そこから自分も他人を受け入れていくことを学んでいく。時には感情に大きな波が生じることをも承知の上で。原論の授業のやり方そのものには当然多くの解決すべき問題があるが、この2年間にそれぞれの学生の心の中に蒔かれた種が、やがて大きく社会や家庭で育っていくことをスタッフ一同期待しつつ毎回の授業のミーティングをしている次第である。